

身辺寸じろく

永井龍男

新潮社
版



© Tatsuo Nagai 1976, Printed in Japan

身辺しんぺんすごろく

昭和五十一年十月五日印刷

昭和五十一年十月十日発行

定価 一二〇〇円

著者 永井龍男ながい たつお

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七十一
Tel・業務部(03)二六六―五一二一
・編集部(03)二六六―五四二一
振替 東京四一八〇八

印刷所 塚田印刷株式会社

製本所 神田加藤製本

製函所 株式会社中田製函

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

自撰作品十一種 永井龍男

雀の卵その他 永井龍男

彩霧 円地文子

蜜蜂が降る 尾崎一雄

尋^い麻^くの家 萩原葉子

歌枕 中里恒子

現代随一の定評ある短篇作家が全作品の中から自撰した最も愛着深く自信のある、短篇の真髄を示す作品——「青電車」「一個」「冬の日」「息災」等11篇。本文二色刷豪華本。 五五〇〇円

少年時代を回想した表題作、発表当時傑作の評判高かった「息災」のほか、「襟巻」「胡桃」「秋数日」「とかげの尾」等、十年間の作品から十一篇をあつめた純文学短篇集。 一五〇〇円

女の奥底にひそむ年齢に関係のない性への激しい執着を、軽井沢の深い霧に映し出されるおぼろな色彩のような幻想と現実のないまざる世界にその極限まで描いたロマネスク。 一二〇〇円

青春の地、早稲田界限に過ぎた時間を想い、蜜蜂の乱舞に万物の新陳代謝を観る。——人生の喜・哀楽、山川草木の変転に、老境の孤高の魂を托して確固たる八編を収める。 一二〇〇円

若い男と出奔した母、家族の修羅場とは別の世界に生きる父。——天才詩人萩原朔太郎を父に持ちながら、一族の酷薄な仕打で暗く閉された青春を送った著者の長編自伝小説。 七六〇円

底光りする艶をひそめた繊細巧緻な筆が、枯淡に見える老境の男女の人生のなまぐささ、凄まじさ、哀しさをえぐり出す、「歌枕」「隠れ蓑」「黄独菜」等計八篇。読売文学賞受賞。八〇〇円

花 筐（はながたみ） 中里 恒子

干 潟 丹羽 文雄

俳 人 仲 間 瀧井 孝作

青 い 沼 島村 利正

夢 の 碑 高井 有一

炎 の 舞 い 津村 節子

『読売文学賞』受賞の名作『歌枕』の続篇『花筐』
「もの言はぬ花」の他「夢の木」「静かな晩」
等評判の近作九篇。人間生活の断面を描出して
小説の醍醐味を満喫させる作品集。 九五〇円

夫婦の倦怠期、そして性の営みがなくなつたと
き、人間の精神はいかに荒廃するか？ 三組の
夫婦がくりひろげる性と精神のかかわり方を、
冷徹な眼で描き出した長篇。 八五〇円

山間の小都市の魚問屋の小僧が河東碧梧桐に出
会って俳句に励みながらも年上の芸者との愛欲
生活に溺れ込んでゆく。文学にひかれる思春期
の少年の姿を活写する自伝長篇。 一六〇〇円

青い沼の微妙な色調の変化に、恋のゆくえを暗
示する「青い沼」。古美術遍歴を背景に、男と
女の宿命的な出会いを描く「北山十八間戸」な
ど、愛の憂愁深い中短編五編。 一二〇〇円

明治30年代のはじめ、秋田の角館から相前後し
て上京した作家田口掬汀、画家平福百穂、出版
人佐藤義亮をモデルに、明治の青年の陰影深い
青春と友情と人生を描く長編小説。 一二〇〇円

雪深い越前織田の里を出奔して十年、東京での
愛の遍歴の後萩野琴代はひとり名陶工の祖父の
傍に戻り故郷の土で焼物に取組む。「伝統と現
代」の問題を背景に人生を描く力作。 八五〇円

回想の本棚 河盛好蔵

釣人(随筆集) 井伏鱒二

随筆集志賀さんの生活など 瀧井孝作

方間記(ほうぶんき) 保田與重郎

芭蕉物語(へ・中・下) 麻生磯次

若き芭蕉 麻生磯次

宇野浩二、太宰治、梶井基次郎……文学を愛し親しんだ七十余年の人生で出会った忘れ得ぬ作家、作品の尽きぬ思い出を、深い追想の念と文学を味わい楽しむ情熱で語る。 一三〇〇円

著者の敬愛する佐藤鵠石は世に知られた釣道の大家。著者との生前の交遊を綴ってその風貌姿勢を見事に描きあげた絶品「釣人」ほか、近作随筆十五編を収録。 一三〇〇円

著者が最も傾倒師事した志賀直哉への愛情こもる回想のほか、文学、交友、俳句、能、釣など全生活を活写する随筆68篇に、併せて第一回、七十回の芥川賞選評を全文収録。 一四〇〇円

十年間にわたる時事の感想、身近な問題をあつめた「懷旧懷人」、豊かな経験と博識でつづる随筆、離乎たる理念でのべる文芸評論等、日本を思う至心が切々と語る多彩な文集。 一六〇〇円

芭蕉を愛し、芭蕉に学んで喜寿を迎えた碩学が、その人柄と芸術をくつろいで語った一六〇〇枚。終生、誠ひとすじの旅に身を置いた、美しい日本人の肖像。 各一二〇〇円

より高く、より深く、より濃く生きるために選んだ俳諧の道を、苦悶と懷疑の長い日に耐えて押し進んだ芭蕉の青春——名作「芭蕉物語」の序章をなす書下ろし。 一〇〇〇円

本のなかの歲月 円地文子

文車日記 田辺聖子

——私の古典散歩——

本が語つてくれること 吉田健一

かくれ里 白洲正子

わが国わが国びと 中野重治

若き日の詩人たちの肖像 堀田善衛

幼少期からの読書遍歴の回想、愛着の深い自他
の作品、印象的な作家の思い出……。文学
の微妙な魅力と読書の深い喜びにあふれる63編
収録の充実した文学エッセイ集。 九八〇円

たとえ幾多の年が過ぎようとも、人の生きる限
りその心は変わらない——記紀の神話から昭憲皇
太后の御歌まで、著者独特の新鮮な角度から読
んだ、古典に思づく様々の人生。 七八〇円

読書の基本を論じてその奥義を伝える——。現
代日本の詩・小説・批評・随筆・伝記等、三十
余冊の書物を例に、本を読むことの楽しさ、喜
びを縦横に語るエッセイ。 九五〇円

山里の美しい自然のたたずまい——そこには語
り継がれた伝説と凄惨な歴史の怨念がこめられ
ている。著者自らがたどったかくれ里を傑作カ
ラー写真と共に綴る。 二五〇円

越前福井の遠い日のふるさと人、敬愛する詩人
や作家達の忘れ難い思い出、その風貌……。人
間への揺ぎない信頼と追慕の思いで語るくさく
さの人物断章三十八編を収録する。 一二〇〇円

戦争の暗雲が低くたれこめる日々、人生と文学
に真摯な情熱を注いだ詩人たち——著者自身の
精神形成を中心に、昭和十年代の偽りなき青春
の詩と真実を描く長編小説。 一五〇〇円

室生犀星全集

〈全十二卷セット〉
別巻二巻

中山義秀全集

〈全九卷セット〉

正宗白鳥全集

〈全十三卷セット〉

梅崎春生全集

〈全七巻セット〉

吉行淳之介短編全集

〈全一冊〉

吉行淳之介長編全集

〈全一冊〉

小説・戯曲・隨筆・詩歌・評論等、日本の文学のあらゆる分野にわたり独特の世界を展開した著者の文学活動の全足跡を、編年体構成で編集し、日記・書簡集二巻を加える。四九〇〇円

処女作品から絶筆「芭蕉庵桃骨」まで、雄勁な格調高い文章で人生の哀歓を謳い、芳醇な詩的世界を築き上げて昭和文学に独自の足跡を残した著者の主要作を網羅。二七〇〇円

明治・大正・昭和の三代にわたり自然主義文学の代表作家として、小説・戯曲・評論等広範囲な活躍をつづけ、日本の文学に大きな影響を与えた著者の主要作品を悉く集める。五二〇〇円

昭和二十一年「楳島」でデビューして戦後文学に確たる足跡を残し、昭和四十年、不朽の名作「幻化」を最後に忽然と逝った著者の主要な作品及びエッセイを網羅する。一一九〇〇円

作者が「散文の処女作」とよぶ「薔薇販売人」以前の「詩の領域」の作品「路上」から「車のなか」に至る二十年間の全作品の中から純文学短編小説六十三編収録。七三二頁。二五〇〇円

「原色の街」「熔の中」「男と女の子」「街の底で」「闇のなかの祝祭」「砂の上の植物群」「技巧的生活」「星と月は天の穴」——十年間の純文学長編小説八編を収録。八一六頁。三〇〇〇円

目 次

身辺すごろく

去年今年	9
立春まで	16
鯉の川	23
桜と躑躅と	30
同町内の人々	37
八十八夜	44
ある朝刊	51
水の匂い	58
お山洗い	65
秋祭り	71
長火鉢のまわり	78
冬遠からじ	85
勲章の記	92

あとがき	中国旬日	一里塚	膝の猫	さんまと目刺	二百二十日	吊りしのぶ	水さまざま	梅雨明け	竹の子	梅から桜	背中から	東京の雪
------	------	-----	-----	--------	-------	-------	-------	------	-----	------	------	------

217	179	171	164	155	148	141	134	127	120	113	106	99
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

身辺
す
ご
ろ
く

身辺すごろく

去^こ 年^ぞ 今^こ 年^{とし}

十一月十二月と、ずいぶん気忙しく暮した。

「日本なんか降服させるのに、武器なんかこれっぽっちも要りやあしません。遠巻きに海上封鎖をして、石油タンカーの出入りが出来ないようにすれば、ものの二月もたたないうちに完全にお手上げです」

もう二三年前に、私をつかまえて事もなげにそう云った人があったが、なるほど石油ショックというやつでその通りになった。私どものような素人の耳に入る話だから、政治家やその道の専門家の間では常識も常識、わかり切った理窟だったのであろう。

「理窟の上では、たしかにそういうことになります。しかしね、わが国を海上封鎖する国なんかどこにもありませんから御安心を」

もしその時、私どもが心配して質問したとしたら、政府も政治家もおそらくそう答えたに違い